令和７年度《楽しむ読書活動から味わう読書活動へ「味読のすゝめ」》

読書活動への扉を開く！

Ｎｏ．R7-3　　桑村小学校　令和７年６月１６日　文責：関口　直

学校図書館にはこんな本もあります！

函南は町をあげて読書活動を推進しています。町立図書館は、知恵の和館の名にふさわしく、とてもきれいで、誰もが利用できるように様々な工夫がされています。先日、図書館協議会で、幼児が図書館に行く場合は、うるさくなるのでとても気を使うといった話が出た中で、「図書館は、子供向けと大人向けで階が違うからから、それほど気にしなくても大丈夫ですよ」という図書館の方からのお話がありました。それ以上に小さいうちから家族みんなで図書館に来て、本を手に取ってもらうこと方が大切であるということなのだと思います。

学校にも図書館があります。以前は図書室と言われていましたが、今は学校図書館としてその役割も大きくなっています。桑村小にも週2日司書さんが来てくれて、図書館の整備だけでなく、委員会への協力や選書などをしてくれています。ヨシタケシンスケや鈴木のりたけ、ノラネコぐんだんなどなど、今人気の本も入っていて、すぐに読むことができます。先日、学校図書館にふらっと寄って蔵書を眺めていたら、桑村小にしかない２冊の本を見つけました。一冊が「もうひとつのむかしばなし」（５年生）で、もう一冊が「食べ物のひみつ」（３年生）です。令和６年度、総合や国語の授業で学んだ成果を一冊の本にまとめたものです。それを司書さんがていねいに装丁し、貸出もできるようにしてくれました。自分たちが作った本を借りることができる図書館ってあまりないと思います。蔵書数では、町や県の図書館に及びませんが、桑村小ならではの蔵書がある世界で一つだけの図書館なんだなと思いました。もし、お時間がありましたら、見に来てください。そして、これからも子供たちと素敵な図書館を作っていけたらいいなと思っています。

もう一つの「かめたろう」　　**現６年　髙橋咲菜さん作**

あなたは、うらしまたろうという物語を覚えていますか。うらしまたろうが亀を助けて翌日にお礼にりゅうぐう城にいき、最後は箱を開けたら300歳のおじいさんになってしまったというお話です。でも、実は、もう一つ別の物語があるのです。

昔々、あるところに、かめたろうという若者がいました。
そんなある日――。浜辺で子どもたちがかめをいじめていました。「かわいそうじゃないか。やめなさい！」たろうはかめをたすけてやりました。

次の日、たろうがつりをしていると、なみまから昨日のかめがかおを出しました。「たろうさん、昨日は助けていただきありがとうございました。お礼にりゅうぐう城にへおつれいたします。どうぞ、乗ってください。」

たろうを背中に乗せ、かめは海のおくへおくへともぐっていきました。さんご林を抜けると向こうにごてんが見えてきました。「たろうさん、もうすぐりゅうぐう城に着きますよ。」

りゅうぐう城では、美しいおとひめさまが出むかえてくれました。「かめを助けてくれてありがとうございました。どうぞごゆっくりりゅうぐう城で遊んでいってください。」

「さあ、めしあがれ。」りゅうぐう城には見たことのないお酒や食べ物がいっぱい。
この生活が恋しくなったたろうは、このまま戻らずりゅうぐう城にいることにしました。ある日、おとひめさまがたろうが飲んでいたお酒の中に動物になる麻薬を入れました。そのことを知らないたろうは、ごくごくと美味しそうに飲み干しました。

次の日、たろうがおきたら、かめになっていました。その目の前におとひめさまがいました。「やっとおきましたね。これからは私のつかいとして過ごしてもらいます。」たろうは毎日毎日おとひめさまのためにご飯を用意したり、移動のときに背中におとひめさまを乗せたり、毎日大変です。

その後、かめになってしまったたろうは、今もおとひめさまのつかいとして働いています。

「桑村小学校５年　もうひとつのむかしばなし」より